

戦時中の「熱帯季題」論再燃

——台湾、ブラジル、南洋の俳句——

白石佳和

一 はじめに

戦前の俳句の論点の一つに、「熱帯季題」がある。熱帯季題は、一九三六（昭和一一）年に渡欧した際、シンガポールに寄港して熱帯の風物などに触れたことを契機に、高浜虚子が採択した一連の季題である。花鳥諷詠を提唱した虚子は、現在も刊行が続

いている『新歳時記』を始めとする歳時記の編纂に尽力し、俳誌『ホトトギス』を通じて多くの近代の季題を見出したと言われる（筑紫、二〇〇九、九五～九六頁）。熱帯季題も、近代における虚子の新季題発掘の流れの一つである。

近年、台湾において熱帯季題に関する研究が進んでいる。代表的な論者である台湾の沈美雪は、戦前の台湾における俳句活動の歴史を詳細に調査・分析し、その論点の一つとして熱帯季

題に注目している。これは、一九九〇年代以降の植民地の日本語文学やポストコロニアル文学の研究の進展が影響している。後述の筑紫磐井や福井咲久良、蘇世邦が指摘するように、熱帯季題は近代の大日本「帝国」の拡張を契機に生まれ、敗戦により領土を喪失したことで消えた植民地の季題である。

しかし、それらの研究には視点を偏りがある。それは、台湾における熱帯季題を中心に論じられていることである。台湾は一九世紀末から植民地となり、現地の季題は早い時期から検討されてきた。しかし、植民地は拡大している。外地には朝鮮や満洲、南洋諸島などの植民地だけでなく、中国の日本人租界、中南米やハワイの移民の社会も含まれる場合があった。北海道や沖縄も、文脈によっては外地となる場合がある。外地の範囲を考えると熱帯季題が問題とされる地域は台湾だけではない。

芭蕉忌や俳諧南に進みたり 虚子（年次不明）

この俳句は、虚子の全集や句日記には見えない句で、矢野蓬矢句集『赤道標』の末尾に付されており、一九四二年または一九四三年の秋、南方の戦地に赴任していた矢野蓬矢に虚子が個人的に送った句だと推定できる。矢野蓬矢は、一九四四年七月、日本文学報国会俳句部会幹事会において、「熱帯俳句」という題で講演を行った。掲出句は講演の締めくりに紹介された句である。この句が象徴するように、戦争中、南進論との関わりから、『ホトトギス』誌上で熱帯季題論の再燃が起こっていた。熱帯季題の問題は台湾だけでなく、戦時中の南洋でもクローズアップされるべき問題である。

本稿では、熱帯季題の問題について、台湾だけでなく他の外地も俯瞰しつつ、一九三六年前後の経緯を捉え直し、さらに戦時中どう展開したのかを輻輳的に概観してゆく。

二 先行研究の検討

まず、熱帯季題の基礎知識と論点を確認する。次に掲げるのは、『現代俳句大事典』の本井英による「熱帯季題」の項の項目解説である。

高浜虚子が提唱した一群の季題（季語）。虚子は一九三六（昭一一）年、渡欧の旅に発ったが、その途次シンガポールを

訪れ、親しく熱帯の気候・風物に触れて、一群の言葉も熱帯における季題とすることを提唱した。虚子自身もその後、コロンボで（古倫母に黄金色なる鶯が居た）と詠じた。その後、四〇年改訂の『新歳時記』夏の部に合計三五の熱帯季題を掲載、その内容は「熱帯」「赤道」等の地名。「スコール」「貿易風」のような気象。「象」「水牛」といった動物。「パイナップル」「椰子」の如き植物等であった。これら熱帯の風物をすべて夏の季題にするということは、あくまでも季節感の中心を日本のそれに置くというもので、世界各地それぞれの季節感を俳句に持ち込むことによる混乱を避けるという方針であった。なお太平洋戦争後日本の版図が狭まったのに連関して、五一年改訂の『新歳時記』以降熱帯季題は削除された。

熱帯季題として高浜虚子から論点が提示されたのは、一九三六（昭和一一）年のことである。きっかけは、高浜虚子が渡欧途中にシンガポール・コロンボなどの熱帯地域に立ち寄ったことだった。シンガポールの句会の経験をもとに、船上から『東京日日新聞』一九三六年四月一四・一五日付に「熱帯季題小論」という論考を発表し、歳時記の夏の部に「熱帯」という一部を設け、熱帯季題を入れることを提案した。一九四〇年の高浜虚子編『新歳時記』改訂時に熱帯季題が新規掲載されたのは上記の通りである。

問を取り上げ、北海道の実景と俳句歳時記の季語体系、季節とのずれの問題を指摘している(宮坂、二〇〇九、i-x頁)。歳時記の季語体系は、京都を中心としたものである(山本、一九七七、二二七-二八頁)。細かいことを言えば、京都以外の地方、地域には何らかのずれの問題がある。

しかし、外地での季語体系、季節感覚のずれの問題は、いろいろな要素が加わり、内地の地方の問題とは質を異にしていた。まず、外地は基本的には植民地であり、ハワイ・ブラジルを含めるとすれば外国である。異文化・異言語の人たちとの接触を日常とする共生の場であり、権力関係が生じていた。句会に参加した人たちは内地から来た日本人が主であったが、朝鮮や台湾では、大日本帝国臣民となった現地の人に加わることもあった。また、植民地二世と呼ばれる人たちもわずかながらいた。内地で生まれ育った日本人作者は内地の季節の感覚をもち、日本の歳時記と現地である外地の季節とのずれを意識しながら俳句を詠むが、植民地二世は日本人でありながら現地に生まれ育ったため、現地人同様現地の季節感覚しからない。外地の季節感覚のずれの問題には、コロニアリズムならではの問題が付き纏っている。

熱帯季題に話を戻すと、熱帯季題は、外地の季節開発における「北方季語」「南方季語」のうちの「南方季語」に含まれると理解できる。「北方季語」は、「温泉」のような朝鮮などの文化を取り入れた季語を除くと、比較的内地日本でも違和感がそ

れほどない季語(三寒四温、ストーブ、マスクなど)が多かったため、戦後の歳時記にそのまま採用され続けたと推測できる。それに対し熱帯季題は、内地の歳時記に採用するにはあまりに文化が異なることから、どのように対応すべきかが議論されてきた。特に台湾では早くからその問題が議論され、一九一〇(明治四三年)には台湾独自の俳句歳時記『臺灣歳時記』(小林里平著)が刊行されるほど関心を集めていた。つまり、外地の季節のずれの問題が先鋭化したのが熱帯季題だったと言える。

以上のような熱帯季題をめぐる文脈を確認した上で、熱帯季題についての研究状況を確認する。熱帯季題についての研究は、二〇〇〇年ごろから徐々に増えている。二〇二二年までの先行研究は、大まかに二つの方向性が確認できる。一つは「一はじめに」に触れた、台湾における熱帯季題の研究である。もう一つは、高浜虚子編の『新歳時記』から熱帯季題を論じる研究である。

一つ目の台湾を中心とした研究を主導するのは沈美雪である。沈は、台湾のホトトギス系俳句雑誌『ゆうかり』とその主宰をつとめた山本孕江を中心に、戦前の台湾俳句史全体の研究を進めている。代表的な論文に、「高浜虚子の『熱帯季題』論と山本孕江の台湾季題観―昭和期の台湾俳人は『熱帯季題』をどう見ていたか―」(沈、二〇二二)、「山本孕江『熱帯圏』考―『ゆうかり』における台湾句と台湾素材の研究―」(沈、二〇二〇)がある。また、その他の台湾関連の論考としては、戦後を含め

た台湾俳句史を論じた呉昭新（医師・俳人）の一連の論考（『台湾俳句史（一九八五～二〇一三）』（一）結社と俳誌」（呉二〇一五A）、「台湾俳句史（一九八五～二〇一三）」（二）季題、季語、虚子の『熱帯季題論』と台湾の歳時記」（呉二〇一五B）、「台湾俳句史（一九八五～二〇一三）」（三）日本語俳句と外国語俳句」（呉二〇一五C）や、日本近世文学研究者井田太郎の「熱帯季題と風土 台湾の俳句と郷土の創成」（井田二〇一三）がある。これらの論は、熱帯季題を巡る虚子の考えと台湾俳人の主張の違いを、日本語文学、俳句雑誌などの資料を検証しつつ丁寧に考察している。一方で、虚子の熱帯季題論は台湾だけに向けて出されたものではなく、熱帯季題小論執筆の契機となったシンガポールその他の南洋や目的地であったヨーロッパなどにおける俳句の国際化を視野に入れた論と考えられる。それゆえ、台湾以外の外地や外国も視野に入れて熱帯季題を考察する視点があってもよい。特に、「一 はじめに」で述べた南洋での熱帯季題論再燃に注目したい。

二つ目の、高浜虚子の歳時記に焦点を当てて熱帯季題を論じる研究は、先に挙げた筑紫磐井、西村睦子の論考が代表的なものである。また、高浜虚子編『新歳時記』の三版種の差異を詳細に分析し熱帯季題を中心に虚子の改訂方針を考察した福井咲久良の論（福井二〇〇九）や、虚子編『新歳時記』の刊行事情と俳誌『ホトトギス』の座談会記事の分析から「熱帯季題論」の生成プロセスと意義を論じた蘇世邦の論（蘇二〇〇八）がある。

これらの論に共通するのは、熱帯季題を植民地の季題として捉える視点である。熱帯季題は植民地を象徴とする季題であったゆえ、戦後の『新歳時記』増訂版（一九五二）において、植民地の喪失とともに削除された、と結論づける。しかし、熱帯季題を削除しても熱帯自体がなくなったわけではない。筆者の立場は、熱帯季題を植民地の季題として捉える考えを継承しつつ、ポストコロニアルの熱帯季題を再検討する立場である。沈美雪はポストコロニアルの台湾俳句と熱帯季題の問題を沈（二〇二二）の結論として取り上げている。この問題も最後に触れたい。

戦前の南洋の俳句関係の論文としては、土屋忍『南洋文学の生成』（土屋二〇一三）の第二部「第六章 高浜虚子と南洋俳句」や細川周平「季語のない国―ブラジル季語をめぐる―」（細川二〇一三、六〇一～六五〇頁）があり、矢野逢矢に触れている。

以上、本論文の目的は、戦争が俳句という文学ジャンルに与えた影響を、熱帯季題というテーマから明らかにすることである。特に、次の二点に焦点化して分析を行う。一、『ホトトギス』と外地の関係の総合的な捉え直し、二、太平洋戦争下における「南洋」の熱帯季題論再燃、の二点である。これらを総合的に検討することで、近年の熱帯季題の問題化に一石を投じつつ、俳句という座の文学が戦争とどう向き合ったのか、その考察の一例としたい。

なお、俳句を「座の文学」とする理由は、俳句が戦争とどう向き合ったのかを検討する上で、近代文学者（高浜虚子）個人

というより「座」＝結社「ホトトギス」を対象としなければならぬと考えたからである。俳句は、グループで活動することによって成り立つ文学である。その構成員には、普通の市民だけでなく政治家や医者、軍人などさまざまな階層の人がいた。戦地詠や銃後俳句など、戦争の影響は句作にダイレクトに表現された。それゆえ、虚子個人の考え方のみを対象とするのではなく、俳誌『ホトトギス』も合わせて考察の対象の中心とする。

三 「熱帯季題」成立の経緯と台湾の苦悩

三では、一九四〇（昭和二五）年までの熱帯季題を巡る議論を整理・検討する。まず、三・一では、熱帯季題論の提案がなされた一九三六年に至るまでの熱帯季題成立の経緯について検証する。三・二では、一九三六年から一九四〇年にかけての『ホトトギス』と外地の関係から熱帯季題論の推移を分析しつつ熱帯季題の問題を検討する。

三・一 「熱帯季題」成立の経緯

熱帯季題論に至る背景として、歳時記編纂の機運の高まりと植民地の広がりによる句会地域の拡大が挙げられる。その両者が合わさる形で、外地の季題の問題が顕在化したと言えるだろう。

まず、歳時記出版をめぐる虚子の動きを確認する。一九三四（昭和九）年に高浜虚子編『新歳時記』（三省堂）が刊行された。

蘇世邦の論によれば、明治・大正期は中谷無涯編『新修歳時記』（俳書堂、一九〇九）などを使用していたが、一九一九（大正八）年三月の俳誌『ホトトギス』に『新題季寄せ』の編纂を行うことが発表され、季題が募集され、それらが形になったのが改造社版『俳諧歳時記』（一九三三）の春の部・冬の部、そして『新歳時記』であった。一九一九年の新題募集の際には、「植民地（マ）」（北海道、台湾、朝鮮、満洲、マーシャル群島³など）の新材料も募集された。この頃すでにこれらの外地に句会組織が存在したことは「二 先行研究の検討」に述べた通りである（蘇、二〇〇八、三六～三七頁）。

『新歳時記』初版の時点で植民地の季題がいくつか採用されていたことは、すでに福井が指摘している。『新歳時記』初版（一九三四）、改訂版（一九四〇）に収録され増訂版（一九五二）で削除された季題として、「温突」「春聯」「初筏」「水碓」「春窮」と、朝鮮半島や満洲と関連する季題が挙げられている。また、「バナナ」「パイナップル」「仏桑花」の三つは、初版ですでに採用され改版の際に「熱帯季題」に収載された季題である（福井、二〇〇九、三五頁）。このように、外地における季題の検討は大正期から始まっていたのである。

次に、虚子が外地の季題について論じた文章を検討していく。一つ目は、「私は矢張守舊派である」という虚子の講演録である。蘇が述べるように、一九三三年八月一日、北海道旭川で行われた日本俳句大会でのこの講演が、外地と日本本土の季節観の

矛盾を述べた最初の言及と思われる。虚子は花鳥諷詠について説明した後、次のように述べる（傍線は引用者、以下同）。

次に俳句といふものは元々京や江戸地方に起つたものでありますが、しかしながら日本の國威が發展するとともに俳句もまた四方に擴がつて行きました。その例は北海道に本土の移住民が増加して以來段々俳句が此地方に擴がつて来ました。それから日清戰爭後には臺灣にも俳句が擴つて行きました。また樺太にもボツ／＼俳句を詠む人が見えて來ました。朝鮮にも出來ました。今日では更に滿洲あたりにも俳句の集団が出來て來るやうになりました。亞米利加の西海岸にもかなりあります。かういふ風に國威が發展するに従つて俳句の勢力も四方八方に擴がつて來る。かういふ状態であります。

この北海道の如きは殊に大分古くから俳句があつた。しかしその俳句は盛んであつたとは言ひ得ないかも知れないが、兎に角古くから俳句が根ざして居つた。そこでこの北海道の俳句は北海道に於てそれ自身發達し北海道の花鳥を諷詠しなければならぬ。北海道獨特の俳句を作らなければ駄目であると思ふのであります。かういふことにつきましては私がよく申上げることでありまして、内地の眞似をしてはいけません。京都や東京の眞似をした俳句を作つてゐては、それではちつとも興味が無い。北海道獨特の俳句で

なければならぬ。かういふことは、私が常に申上げてゐることでありませぬ。しかしそれにしても斯ういふことを忘れてはいけません。其は俳句は京都や東京を中心にして興つた文學でありますからして、矢張り京都や東京を中心にして考へなければならぬといふことであります。北海道の自然を詠ひ北海道の風物を詠ふ考への下に京都や東京を忘れ去つて季題などを取扱つては遂に季題の定めなどがまち／＼になつて來て俳句が成立たなくなるかも知れません。

これが北海道だからまだいゝのであります。一旦南洋などに參りますと季が滅茶苦茶になりまして歳時記で定めるところのものは一つの空文となつてしまひます。さうなると詩はありますが俳句はなくなりませぬ。嚴密に申せばこの北海道でありまして内地で定めた歳時記を信頼しなくなりまして北海道獨特の歳時記を編むとなりますと季の約束が滅茶苦茶になりまして、俳句といふものの存立を危くします。たとへて見ますと北海道では梅や櫻は五月の末から六月に一時に咲くといふではありませんか。梅は早春から咲き、櫻は四月に咲くものとして歳時記は出來てをりますのに、六月に梅や櫻が咲くとなりますと一寸困つたものです。併し北海道の俳人諸君は隠忍して中央の歳時記に従ひ

北海道の梅や櫻は六月に咲くといふ風に、先づ京都や東京を土臺に置いて「北海道は」

という風に、即ち本家では斯うだが分家では斯うだといふ風に之を詠ずることを忘れぬ時は、歳時記はゆるがず、俳句も亦微動だもせず存在します。日本の本土以外に居る俳人諸君も何處迄も本家の歳時記を尊重して、われ／＼分家では斯く／＼の相違があると先づ本家を土基に置いて詠するといふ風にして貰ひ度いと思ふのであります。

（定本高濱虚子全集）一一、二七六―二七七頁）

最初に、日本の国威の発展に伴って俳句の勢力が拡張したことを述べる。拡張先として挙げられているのは、北海道、樺太、台湾、満洲、アメリカ西海岸である。これらは「外地」とまとめることができるが、北海道は日本の一地方であり、またアメリカは外国であるので、すべて植民地というわけではない。

次の段落で強調されるのは、北海道独特、地方独特の俳句を詠め、という主張である。それと同時に、内地⇨京都・東京を中心と考えなければならぬということである。それを忘れて北海道独特の自然を詠むと、「季題の定めなどがまちまちになつて来て俳句が成立たなくなる」と述べている。虚子は内地と北海道の関係を、「本家」「分家」という言い方で説明している。「本家」を土台として、たとえば梅は早春、桜は四月の景物とするが、「分家」北海道ではそれらが六月に咲くのだ、とする。内地と外地の季題のずれの問題を、あくまで京都・東京を中心とすることで解決する、というのが虚子の基本的な考えである。

しかしながら、傍線の部分に、熱帯季題論につながる虚子の懸念が示されている。虚子は、北海道はそれほど距離的あるいは文化的に遠くないが、南洋になると歳時記で定めた季題の記述事項が「空王」即ち現実とかけ離れて役に立たなくなる、と述べている。この講演は北海道で行われたものであり、北海道に即した議論が展開され、かけ離れた南洋の場合の解決策は示されていない。だが、傍線部の記述からは、熱帯季題の問題の萌芽が読み取れる。

次に、俳誌『ホトトギス』の座談会での虚子の発言を辿りたい。取り上げるのは、表一の三回で

表一 外地関連『ホトトギス』座談会

	『ホトトギス』掲載号	テーマ	参加者
1	468(1935年8月)号	満洲	高濱虚子、赤星水竹居（満洲帰国直後）、中村草田男、三宅清三郎、山口青邨、富安風生、鈴木花蓑
2	470(1935年10月)号	ブラジルの新聞、国際歳時記	高濱虚子、赤星水竹居、富安風生、三宅清三郎、鈴木花蓑
3	473(1936年1月)号	台湾、ブラジル	高濱虚子、山口青邨、赤星水竹居、関圭草、佐藤濙人、三宅清三郎、中村秀好、中村草田男、上林白草居

ある。

『ホトトギス』では毎月座談会を掲載していた。その中に、地方や外地・外国から戻ってきた同人を囲んで、訪問地の俳句・俳壇の事情を尋ねる形式の座談会があった。

一の座談会は、満洲帰りの赤星水竹居を囲んだ会である。参加者は表の七名である。著名な虚子、草田男、青柳、風生以外の三名について、簡単に経歴を紹介する。赤星水竹居は一八七四（明治七）年生まれで虚子と同年、一九二五（大正一四）年より虚子門下に入った。三菱地所初代社長で、『ホトトギス』の事務所があった丸ビルの家主でもあった。三宅清三郎は、一八九八年生まれ、一九二二年に虚子門下に入り三二年に『ホトトギス』同人となった。戦前は安田銀行に勤務していた。鈴木花蓑は一八八一年生まれ、一九〇四年ごろから『ホトトギス』に投稿、一九二九年、『ホトトギス』同人。一九一五年から大審院書記を務めた。座談会は、満洲の俳人たちの動静について水竹居が語る場面が続いた後、満洲の俳句の話題へと移っていく。

水竹居。銀行家としては兎も角として、これも一つ俳句の清三郎として乗り込まうではないか。

清三郎。僕なんかでは仕様がな……が、虚子先生がいらつしやる毎に満洲の俳句は確かに進んでるますね、それが契機となつて。

草田男。三溝さんなんか満洲は俳句が作り憎いと言つてこ

ぼしてゐますね。

虚子。前言つたやうに季題になるものが少ないんだから。草田男。リアリズムでいけばなんとかなるんぢやないんですかね、何でもないとところにあるまゝ、の姿の面白味を見出すことが出来れば相當作れるんぢやないんですかね。

虚子。相當に作れることは作れようが、併し俳句はもともと日本本土のものだ。

清三郎。いまはもうそこまで行つてゐるんぢやないか……先生が満洲の俳句を御覧になるやうになつてから今日までに満洲の俳句はたしかに異常の進歩をしたと思ふ。

（中略）

清三郎。段々満洲の風物、風趣が一層しつかりと分つて来れば俳句も益々いゝものが出来るでせう。

草田男。内地の風物の如く、そのまま趣の豊富なものはないでせう。満洲の俳人は最初、それを其地で見出さうとしてか、つたから失望した。それから「満洲にある人は、満洲にある獨得トクのものを詠めばいゝ」といふ忠告をとりあげて、今度は、少時、満洲獨得の珍らしい材料を材料として句を作つた。併し、これも、いさゝか、内地へ向かつて送る、報告のやうなところがあつた。此頃では、そこから、やゝ脱出して、茫漠とした、乾いた風景の、そのまゝでの趣をリアリズムで捕へていかうとするやうになつた。これは當然なことで、その方法によつていくよりほか、満洲俳

句の眞の發展の道はないはずなのだ……。

清三郎。三度變化したわけだよ、満洲の俳人は初めは内地の句を作り、次いで旅行者の句を作り、それから段々満洲に住み着いた者の句を作るやうになつた、そんな心持がする。

虚子は、朝鮮・満洲方面に四回（一九二一年朝鮮のみ、一九二四年満鮮、一九二九年満鮮、一九四一年満鮮）訪問している。清三郎の最初の発言は、一九二四年と一九二九年の虚子の満洲訪問を指したものと思われる。満洲の俳句の可能性を語る中で、満洲のありのままの姿を句詠すればいい、という草田男の発言に対し、虚子は傍線部「併し俳句はもともと日本本土のものだ」と述べている。この考え方は一九三三年の講演から一貫している。

では、外地の俳句はどうあるべきかについて、中村草田男と三宅清三郎は、外地の俳人の傾向を次のようにまとめる。まず外地（満洲）に来たばかりのうちは内地の句を作り、次に旅行者の句、すなわち満洲にある独特の珍しいものを詠む段階に移行し、さらに満洲に住み着いた者の句、つまりリアリズムで捉える句となつていく。虚子の満鮮訪問によつて満洲はその最後の段階まで進歩したのではないかと二人は述べている。外地の俳句の發展モデルが示されていて興味深い。

二の座談会の参加者は、虚子、水竹居、風生、清三郎、花蓑の五名である。ブラジルの邦字新聞に、日本から経済使節とし

て渡伯した関圭草の記事が掲載されたことが話題の一つとなっている。ブラジル邦字新聞の七月締切の季題が「冬の蝶」、八月締切の季題が「枯芝」とあるのを見て、ブラジルでは内地の歳時記が通用しないこと、ブラジルの国土の広さが話題となっている。そこから清三郎が、「ゆくゆくは國際歳時記とでもいふものが必要になりますね」と提案して、外地の季題についての議論が始まる。風生が、枯芝の季題を例に挙げて次のようなことを述べる。季節的現象としての枯芝は、南米と日本では連想するものが異なるので、鑑賞者はその使い分けをしなければならぬ。枯芝に対して固定した季感を予め持つのは間違いだ

が、同時に共通した季感を離れて枯芝の句を鑑賞してもならない、という。

それを受けた虚子の次の発言は、一つの季語論となつている。その発言を要約すると、次のようになる。

一、俳句が日本の本土から生まれた文藝であるから、歳時記は日本の本土の氣候が基準。北海道や九州のような辺鄙なところでは本土の歳時記に不便を感じることはこれまでも聞いたが、やはり内地に拠るべきである。

二、しかし、北満洲や台湾になるとその不便が多くなり、内地の歳時記通りにいかないのが悩みの種。さらに、赤道以南のブラジルは想像外。ただ、ブラジルの場合、歳時記の春の部を、二・三・四月から九・十一月のように、月さえ改めれば内地の歳時記が適用できるかもしれない。

三、春夏秋冬ということは重要な問題ではなく、「時候の変化によって起こる現象」「四時の移り変わりの現象」「地球の回転によって起こる変化の現象」を詠うことが俳句の使命である。俳句が世界化して地球の至るところで作ることになれば、国際歳時記が編纂される時が来ることが予想される。

四、そうは言ってもやはり俳句は日本で興った文藝であり、春夏秋冬を詠う日本で発達した文藝。あくまで日本を標準(示)とすべき。

この虚子の主張は、一九三三年の講演にあった、南洋のよう
にかけ離れた場所の季題のずれの問題についての答えとなつて
いる。ブラジルという極端に遠い場所の俳句事情を契機に、そ
の答えを述べている。講演では、内地の歳時記を本家と考え、
北海道のような中心から離れた場所で俳句を詠むときも日本本
土を標準とせよ、という考えであつたが、この座談会では、将
来の国際歳時記の編纂を想定した意見が交わされている。その
意見は虚子だけでなく清三郎やその他の人々も認めている。内
地の歳時記ではなく外地、外国に応じた国際歳時記を認める発
言は、一九三三年の講演から発展・進化した意見である。

三の座談会では、台湾帰りの山口青邨とブラジル帰りの関圭
草を中心に、高浜虚子、中村草田男、三宅清三郎、赤星水竹居、
中村秀好ら九名が参加していた。

この座談会では、ブラジル、台湾それぞれで季題のずれの間

題について白熱した議論が展開している。ブラジルの俳句の季
題で議論の中心となっていたのは、移民の子孫についてである。
念腹のような日本からの移民や圭草のような旅行者・一時滞在
者は、「内地での季感をそのままブラジルの季節環境に当ては
めて諷詠」するが、移民の子孫は「季節の變化の感受性が薄ら
ぐ」だろうと心配している。つまり、将来日本とは季節感が全
く異なる俳句の世界が出現することを想像している。これは、
二の座談会の国際歳時記につながるテーマである。台湾の季題
の議論では、内地の季感と現地台湾の季感とのずれの中でど
のように俳句を詠むべきかがテーマとなっている。青邨はその例
として、二度の稲刈りと「椰子に月」という取り合わせを挙げ
ている。二度の稲刈りも椰子に月の取り合わせも、台湾の人が
台湾で作る台湾で鑑賞するには問題ないが、内地の人にとって
は前者・後者とも珍奇あるいはエキゾチックなものと捉える。
青邨はその点が台湾の俳人たちの悩みどころだと述べる。
この悩みについて、虚子は他の人たちと次のように論じて
いる。

虚子。臺灣で句を作る人は多少の不便はあるけれども時候
に忠實で本當に感じた句を作ればいい、こちらでも大抵は
分る。さういふ懸念は除けて安心して内地人の模倣をしな
いで本當の感じを作つて居れば先づ見逃さないといふこと
を言つて置く。

青邨。私も臺灣そのものを作ればいいと言つて來ました。虚子。内地が頭にあるからそれが却つていけない、内地の眞似をしたのでは生きた句は作れない。

草田男。結局、季題の約束の趣味によらないで、直接に、対象のおもむきを強く掴まなければならぬことになる、つまり、ますます寫生が必要だといふことになる。

虚子。然り、寫生。

青邨。正しい寫生の句でも内地の人が素直に受け取つてくれないのぢやないでせうか。

草田男。そんなことないと思ひます、ある程度以上に、しつかりと対象が掴めておれば、内地人にもちやんと通じると思ひます。結局は作家一人の問題でせう。

虚子。この問題の起つた時分に言つて置かねばならぬのは決して季題が違ふから内地人に分らないといふやうな考をよして、忠實に臺灣の句ブラジルの句を作つて貰ひたい。青邨。この場合内地のことを忘れるんですね。

虚子。忠實に寫生をすれば必ず我々にもそのよさが判る。偽りなしに懸念なしに臺灣の鋭い感じを詠つて貰へば内地人にも感銘を与える。

虚子やその他の人の主張は、忠實に寫生をすればよい、といふ一言に尽きる。季題のずれはあつても、内地人の模倣ではなく感じたそのまま対象を把握して句を詠めば、現地の人だけで

なく内地人にも感銘を与えるというのである。これは、一の座談会で草田男が述べた外地での三段階目での句詠方法、その地に住み着いた人がリズムで句を詠む方法と通じる。同じく草田男は三の座談会の引用部分で「結局は作家一人の問題でせう」と述べている。青邨や秀好も別の箇所で「一人の偉大なる作家にとつてはこんな問題はすべて消失してしまふ」「その地方における優れた俳人の出現に依つて解決される問題」と、草田男と同趣旨のことを指摘している。忠実に寫生せよ、という課題の解決方法は、優れた俳人が出現することだ、と述べているのである。

寫生を重視するべきだ、という虚子たちの発言は、主に台湾の俳人に向けられたものである。なぜなら、その発言は、青邨が提起した台湾俳人たちの悩みに対しての答えだからである。先の引用に続いて、秀好は次のように発言する。「念腹氏が行つてからブラジルの風物が俳句の上に次ぎ／＼に適確な筆鋒で描かれて來ましたからね」この発言は、寫生を實踐してブラジルですぐれた句を生み出している佐藤念腹を高く評価した発言である。念腹は一九二八年に『ホトトギス』初巻頭を飾り、一九三四年には外国在住初の『ホトトギス』同人となつた。一九二八年の巻頭句「雷や四方の樹海の子雷」は、雷が樹海に広がりこだまする様を「子雷」と表現した点が、南米の雄大さをよく描いているとして高く評価されている。虚子たちは台湾の俳人たちへの期待を込めて、このような発言に至つたと思われる。

以上、一九三三年の講演録と三つの座談会を分析してきた。熱帯季題論の直前までの虚子および『ホトトギス』の意見をまとめると、次のようになる。

一 俳句は日本で生まれたから、歳時記は日本（京都、東京中心）を基準とする。北海道などの地域も、あくまで日本の歳時記を基準とする。

二 しかし、満洲、台湾、ブラジルなど極端に遠い地域は、日本の歳時記を基準にするとうまくいかないことが多くなる。その場合、春夏秋冬に拘泥せず時候の変化の現象を俳句に詠めばよく、写生を追求するべきである。

この二点に加え、国際歳時記つまり現地の歳時記を認めるかどうかという問題がある。虚子は、将来的に世界各地に国際歳時記が編纂されることを予想しつつも、日本を標準とすべきだとも発言している。この問題については虚子も結論を出しかねているのである。

近代化に伴ってグローバルな世界となり、帝国主義的な拡張だけでなく経済や社会が国際化した。日本人が外地や外国に進出する時代となり、俳句も世界各地で詠まれるようになった。季題のずれの問題について、日本の歳時記を基準とするだけでは対応しきれなくなり、『ホトトギス』の本格的な国際戦略として検討し始めたのが、熱帯季題論前夜だったのではないだろうか。

三・二 熱帯季題論の意義

熱帯季題論が提唱されるまでの季題のずれの問題についての虚子の主張を見てきた。虚子は、歳時記についてはあくまで京都・東京を中心とした日本を基準とする、という姿勢を保ちながらも、満洲やブラジル、台湾など内地と「大きく」ことなる季感を持つ地域での対応に苦慮し、将来的な国際歳時記の可能性の提示や、写生を推し進めることによって解決できないかと考えていた。さらなる解決方法が、一九三六（昭和一一）年の熱帯季題論の提唱であった。

虚子の熱帯季題論は、次の二つの論をさす。一つは、一九三六年四月一四日、一五日の二日に分けて掲載された「熱帯季題小論」、もう一つは、一九三六年九月の『ホトトギス』に掲載された「熱帯季題小論補遺」である。これらの論は、「一 はじめに」で触れたように、虚子の欧州旅行を契機に出されたものである。虚子の渡欧の旅程を簡単に示すと、一九三六年二月一六日に箱根丸に乗船して出航し、シンガポール（三月四日）、コロンボ（三月一〇日）などを経由して、三月二七日にマルセイユ着、その後は陸路でフランス（パリ）やドイツ、イギリスを歴訪した。五月八日にマルセイユから箱根丸に乗船し、シンガポール（五月三〇日）、台湾の基隆（六月六日）を經由して六月一五日に横浜に戻った。往路の航海では横光利一も同乗しており、航海中に五回の句会が船上・寄港地で行われた（中井二〇二〇）。「熱帯季題小論」は船上で執筆されたものである。⁸⁾

「熱帯季題小論」は、欧州旅行の目的として、欧州の風物に接することのほかに、日本と全く気候風土の異なる熱帯での季題の悩みを解決することがあったのだ、と述べることから始まる。その論点をまとめると、次のようになる。一、俳句は日本の本土が生んだ文藝であること、二、しかし内地の季題に準じて熱帯において花鳥諷詠を行うのは不可能だから、夏の部に熱帯という季題を設ける、三、『新歳時記』改訂の際に熱帯部分を付加し、台湾・ハワイ・委任統治南洋諸島もこれに準じる、というものである。そして、このような仕組みを作ることによって「これからその俳句に、清新な写生句を求め得られる」のだとする。季題を新たに設定するのは写生のためだとする虚子の主張は、これまでの主張と一貫している。虚子は、渡航において通過した土地をもとに、赤道、スコール、熱帯、象、鰐、護謨（ゴム）、椰子などの季題を挙げている。特徴的なのは、シンガポール、コロンボなどの地名を季題として挙げている点である。

「熱帯季題小論補遺」（以下「補遺」とする）は、帰国後に書かれた文章である。「日本は古來から熱帯地方を常夏の國と呼んで居る」と述べ、日本の四季を中心に考えたと熱帯地方の風物を夏の季題とすべきだ、と主張する。これは、「熱帯季題小論」での、夏の部に熱帯という一連の季題を設ける理由を補強した説と言えるだろう。さらに、「補遺」で特に強調されている点がある。それは、地方別歳時記についてである。二箇所而言及があり、一つ目の言及では、「熱帯地方の歳時記を編むがよい

といふ説もあるが、そんな風に地方／＼地方で歳時記が出来たら俳句の統一がむづかしくなる」と、あくまで本土の歳時記の尊重を唱えるが、二つ目の言及では、「佛蘭西の歳時記、亞米利加の歳時記を作つてもいいが、併し日本の歳時記を宗としなければならぬ」と、やや譲歩して地方別歳時記の可能性を認めている。

「補遺」は、渡欧の途次に書かれた「熱帯季題小論」の軌道修正版的な側面がある。前段で指摘した地方歳時記編纂へのやや譲歩的な態度もその一つである。また、コロンボなどの地名を季題に取り上げた点についても、むやみに季題にするのではなく、「少くとも日本の郵船が絶えず航海してある熱帯の、世界の公道」のみ夏季の季題にする、と述べている。これは、一九三六年六月の『ホトトギス』座談会における地名の季題についての議論を意識していると思われる。その座談会では、西山泊雲や山口青邨らが地名を夏の季にすることについて疑義を呈していた。また、熱帯の季感を感じる語がすべて季題となるのではなく、選択が大事であり、自分の論はあくまで試案だから再考の余地があることを終わりに述べ、論を閉じている。

熱帯季題論は誰のためのものであったのか。直接的には、熱帯地域で俳句を詠む人のためである。具体的には、シンガポール、コロンボなどの南洋地域、さらには熱帯に含まれる台湾、ハワイ、委任統治南洋諸島の人たちのためである。これは、外地の季題のずれの問題について、特に熱帯についての大胆な解

決策であった。「補遺」には、寒帯の季題についての提案例も示されている。熱帯季題のこの解決策を使って、俳句の国際的な広がりに対応しようとする意図が読み取れる。

俳句の広がり、といったとき、「外地」はどこなのか、また「外地」だけでいいのか、という問題が出てくる。外地とは、通常本州、四国、北海道、九州以外の日本が支配していた地域、つまり植民地をさす。しかし俳句においては、移民が住むブラジルやハワイ、日本人が駐留するアメリカ西海岸やヨーロッパなどの外国の問題にもなっていた。その意味で、季題のずれとは、植民地の季題のずれだけでなく、外国の季題のずれの問題であった。俳誌『ホトトギス』では、「補遺」発表の翌一〇月号から、「外國の俳句」コーナーが創設された。熱帯季題論は、植民地拡大の文脈だけでなく俳句の国際化の文脈の中で現れた論であることは重要である。ただ、虚子の中では、外地と外國の境界がいまいのまま、それらをすべて「花鳥諷詠國の領土の延長」と捉えていたようである。

このように、熱帯季題論の意義は、「花鳥諷詠國」の広がりによって生じた季題の「大きな」ずれの問題について、一つの解決策を提案したことにある。その解決策は、南方という日本から遠く離れ文化も大きく異なる地域について、独立した歳時記を編纂するのではなく、あくまで日本中心の歳時記を基準としつつ、熱帯の部という特別な部立を日本の歳時記に組み込むことであった。現地歳時記の独立と日本中心の考え方の折衷案

とでもいうべき解決策である。その解決の問題点は、熱帯地域は常夏すなわちいつも季節が夏しかない、と限定された点である。

なお、一九三七年一月の座談会における中田みづほの発言には、台湾に熱帯季題制定への反対者がいたことが示唆されている。沈美雪によれば、『ゆうかり』主宰の山本孕江らが台湾の風土・季節感の独自性を主張し、独立した歳時記の編纂や台湾の季材の解説を重視していたという（沈、二〇二一、一五三頁）。これは、「三・一」熱帯季題「成立の経緯」の最後に言及した国際歳時記、つまり日本以外の地域での独自の歳時記を編纂するかどうかに関わる問題である。これについては、次の四でも問題として挙げられているので、そちらでまとめて考察したい。

四 大東亜戦争下の南洋俳句と熱帯季題論

四・一 戦時の熱帯季題論再燃

熱帯季題論は、一九四〇（昭和一五）年の『新歳時記』改訂版において、虚子の予告通り夏の部に熱帯季題が記載されて一区切りとなった。その後、第二次世界大戦の戦線が太平洋に拡大する中、一九四三年四～六月の『ホトトギス』誌上に熱帯季題論に関する言説が集中的に掲載された。

この時期、『ホトトギス』は戦時の物資不足でページ数が大幅に減っていた。その中で熱帯季題論に紙幅が割かれたことは、この問題の注目度の高さを物語っている。どのようなことが論

点となり、なぜ注目されたのであろうか。以下、四月、五月、六月の熱帯季題論の展開を追い、考察する。

一九四三年四月号の『ホトトギス』には、南洋関係の記事として、「熱帯季題に就いて」(高浜虚子)、「南洋雜詠」(永田青嵐)、「鳳凰木」(赤道直下の餅搗)〔以上矢野蓬矢〕が目次に並んでいる。虚子の「熱帯季題に就いて」は、そのほとんどが、台湾の俳人山本孕江の『山本孕江句集』(一九四〇)に虚子が寄稿した序文からの抜粋引用である。引用の前には、以下のような記述がある。

南洋季題のことが世間で問題になつてゐるやうであるが、日本文學報國会の幹事會の席上にも話題になつて、僕の意見を聴かうといふ事になつたさうである。私の意見は簡單である。それは、山本孕江句集の序文に書いた通りである。茲に其句集の序を抜萃しておく事にする。尙ほ永田青嵐・矢野蓬矢兩君は任地で作つた句を私に示した、之を掲げることも、實際的に南洋の季題を解決することに役立つこと、思つて茲に載せることにする。

〔ホトトギス〕一九四三年四月号、一七頁

「南洋季題のことが世間で問題になつてゐるやうである」とあるが、これは、俳句総合誌『俳句研究』(改造社)一九四三年三月号に掲載された蓮田善明の「季の新問題」を意識した発言ではないかと推測される。蓮田は明治以降、季題の大きな動揺、

問題が三度起こつたとし、一つ目が太陽曆採用の時、二つ目が碧梧桐の無季自由律俳句が広まつた時、そして三つ目として大東亞戰爭を挙げ、国の勢いとともに日本の季を基準とする俳句が地球に広まるべきだ、と主張している。季節感の基準をあくまで日本に置き熱帯でも日本文化をわずかに意識しながら句を詠むべき、と述べ、簡単に現地歳時記を認めないが、将来的には必要である、という意見は、虚子の論に類似している。国威発揚の雰囲気の中で、俳句が南進論、大東亞共榮圈の拡大という文脈に取り込まれていく様子がうかがえる。それが熱帯季題論再燃につながつたのである。

『山本孕江句集』の序文における虚子の意見は、蘇が指摘するように、これまでの虚子の論とほぼ同じである(蘇、二〇〇八)。日本の歳時記を基準として句を詠み写生するべきだ、と述べる一方、将来的な現地歳時記を否定せず、ぜひ将来「俳諧國」として独立してほしい、というのが虚子の意見である。その実例として、永田青嵐・矢野蓬矢の句と文章を六ページ(一八一―二三頁)にわたつて掲載している。

永田青嵐(本名秀次郎、一八七六―一九四三)は、三高時代から虚子と親しく俳句を嗜んだ。三重県知事、東京市長、大臣を歴任、一九四二年陸軍の軍政顧問としてフィリピンに滞在するが、マラリアに罹り帰国し、一九四三年九月に亡くなった。掲載された永田の句は約八〇句で、フィリピンやシンガポール、ジャワ島などで詠まれた。「銀翼の蔭の夏草憩ふべし」「ゴム園に病

院ありぬ雲の峯」などの句がある。矢野蓬矢については四・二に後述する。

一九四三年五月号の『ホトトギス』には、四月号の虚子の記事を受けて、永田青嵐の「熱帯季題の考へ方」(二〇三頁)という文章が掲載されている。永田は南洋(フィリピンその他)の経験をもとに、虚子の考えを支持している。また、台湾の熱帯季題反対論にも触れ、「山本孕江君が臺灣の歳時記を確立して臺灣の俳句を建設したいと言はれたさうであるが、之は私の考では至極當然であつて何の不思議も感じない」、「日本歳時記の神聖と言ふ事と各地に歳時記を作ると言ふ事は並存して妨げ無い觀念であつて、決して正面衝突する觀念では無い。」と、現地歳時記による「俳諧國」の独立と日本歳時記中心、神聖視の考へ方は併存可能なのだとしている。

さらに、『ホトトギス』一九四三年六月号には、「熱帯季題」に關聯して「佐藤漢人」、「熱帯季題の問題」(福井圭児)などの論や「俳句界近事」(西山泊雲)など熱帯季題に触れる記事がいくつあった。それらの記事の内容は、「今後寒帯熱帯に我々日本民族がどしどし擴がり、且つ又日本語が植ゑ付けられるに従つて必ずや俳句も難事ながら自然に或る形を持つて其處に生え出るであらう」(佐藤)、「今や大東亞の建設に逞しき努力が續けられてゐる今日、日本固有の俳句も日本を母體として廣く南方諸地域に根を張るのは蓋し當然」(福井)、「熱帯句といふ様なものが出來たといふことは俳句界の量の擴がりであつて、これ

も我皇軍が連戦連勝領土を擴げていただいた賜に外ならない」(西山)のように、どれも戦争における南進論、領土拡大に絡めて論じられている。戦争に直接関わるような形で熱帯季題が論じられているのは、一九三六年の論調とは大きく趣を異にしていると言える。

四・二 矢野蓬矢と「赤道標」

戦時中の熱帯季題論再燃において俳誌『ホトトギス』で特に注目されたのが、矢野蓬矢という俳人である。矢野蓬矢(本名兼三、一八九六―一九八二)は、内務省人省ののち、東京、京都をはじめとする県や警視庁の部課長を歴任し、一九三八(昭和一三年)から四一年一月まで富山県知事を務めた。一九四二年八月、陸軍司政官としてスマトラ西海岸州長官に就任し、一九四四年までその任に就いていた。

矢野は、富山県知事の職を辞した後、『ホトトギス』の記事にたびたび登場するようになった。一九四一年一月号には、矢野が書いた富山県八尾町にある虚子の句碑の句碑祭を行った記事が、また六月号には、東京の矢野蓬矢邸で高野素十、中田みづほらが参加した句会の記(野村泊月)が掲載されている。一九四二年からは、南方の任地の俳句や文章が毎月のように掲載された。表二は、一九四二年から一九四四年にかけて、『ホトトギス』に取り上げられた矢野蓬矢關連の記事(雑詠は除く)の記録をまとめたものである。

表二 『ホトトギス』における矢野蓬矢関連の記事

年	月	頁	記事のタイトル	簡単な内容
1942	10	104	昭南にて	昭南についての俳句と文章
	11	25	着任	スマトラ着任についての俳句と文
	12	14	ドリアンを食ふ	俳句 10句
		14	赤道標	俳句と文章
1943	2	15	ミナムカボウの女	文章
	3	11	(なし)	矢野からの電報掲載(セキドウカヨリモコキノガタテマツル)、虚子の古希の賀の祝い
	4	21-22	鳳凰木	俳句 35句
	4	22	赤道直下の餅搗	俳句 2句を含む文章
	6	12	バリ島遊記	俳句 18句
	7	14-15	南スマトラ旅行記	俳句約 100句

一九四二年一〇月から一九四三年七月にかけて、ほぼ毎月矢野の記事が掲載されている。この時期、矢野蓬矢と昭南(シンガポール)の石田敬二の二人の記事掲載が突出して多い。石田と比較しても矢野の掲載回数はかなり多い。石田敬二は、一九三六年の虚子の渡欧の途次、シンガポールに上陸した虚子を案内し句会を開催した人物であり、シンガポール在住俳人として以前から『ホトトギス』誌上に知られていた。それに対して、これまで『ホトトギス』においてほとんど知られていなかった矢野がこのように頻繁に取り上げるのは、矢野が軍の要職に就いていたことが関係していると推測できる。

一で触れた矢野蓬矢の句集『赤道標』は、南洋での二年間の俳句六〇〇句をまとめた句集である。終戦を一ヶ月後に控えた一九四五年七月一日に、ゆかりのある富山市の発行所から非売品として刊行された。虚子はその序文で、「此句集は南方季題の問題の喧しい時に當つて、それに對する貴い答へであると思ふ」と述べ、南方季題すなわち熱帯季題の論が再燃している中での実作を通じた答えがこの句集であるとする。句集の最後には、矢野が日本文学報国会の俳句部会幹事会において、一九四四年七月一日に行った「熱帯俳句」という講演録が収載されている。虚子の序文の熱帯季題への言及、矢野蓬矢の南洋季題を駆使した俳句、さらに俳句実作を踏まえた上での熱帯俳句の論が収められたこの句集は、戦時下の熱帯季題論再燃を総括する意義を持つ。

序文の虚子の意見と矢野の講演の主張を整理して分析したい。まず、虚子の序文を分析する。二ページの序文のほぼすべてが熱帯季題の話題である。シンガポールの石田敬二の名前を挙げながら一九三六年の熱帯季題論と『新歳時記』に熱帯季題が収録されたことから語り始める。次に、大東亜戦争が始まって南洋の俳句を作る上での季題の扱いが再び大きな問題になった、と述べる。虚子の意見は変わらず、日本内地の季題を基準に俳句を作るべきだ、というものである。ただ、台湾や山本孕江に言及しながら現地歳時記が将来できることを否定せず、その時期が来るまで内地の歳時記を基準とするほかない、という。虚子は、台湾の歳時記が制定される日が近づいている気持ちも吐露している。

翻って南洋の話に移り、台湾に比べて南洋はまだ俳句が詠まれる歴史が浅く、南洋歳時記制定までには時間がかかるとし、その中で、実作によって南方季題の問題を解決を示唆している矢野の『赤道標』の価値を高く評価している。台湾の『山本孕江句集』の虚子の序文と比較すると、『赤道標』の序文では台湾の歳時記独立が近づいたことをはっきり述べ、台湾歳時記を認める方向性が強まっている。戦時下の熱帯季題論では、日本の歳時記を中心としながらも、歳時記の独立問題を曖昧にするのではなく、現地歳時記とどう両立するか、という具体的な歳時記、「俳諧國」の独立の問題に焦点が移行している。

次に、矢野の「熱帯俳句」の講演録を分析する。まず、実際

に南洋へ行くと、南洋は非常に広く多様性があり、一概に「南洋」とまとめられない、という。次に、南洋の風物について、詠作例を挙げ日本の風物と比較しながら説明していく。例えば、熱帯の風物の名前がわからない場合が多く、その風物に日本名をつけることが以前から行われていたことや、地名が季題になる問題についてぜひそれを認めてほしいことなど、現地の体験に即して俳句に関連する意見を述べる。最後に、熱帯季題の問題について、熱帯季題独立論と南方歳時記論という言い方で意見をまとめる。矢野は、歳時記分類の春夏秋冬以外に熱帯季を設ける熱帯季題独立論に賛成の立場をとる。つまりこれは、あくまで日本の歳時記を基準として、夏の部に熱帯季題の部を置いた『新歳時記』改訂版の考えに賛成することである。南方歳時記論とは、日本の歳時記に準じた四季の歳時記を、南方で独自に作ったほうがよい、という論である。矢野はこの立場に反対している。南方には四季がなく、雨季乾季はあるが季節の推移として感じられるものが少ない、というのがその理由である。矢野は、熱帯季題を置くこと＝熱帯季題独立には賛成だが、あくまで日本を中心とした歳時記の中で独立するという意味であり、完全に日本の歳時記から独立した南方歳時記には反対している。現地歳時記を認めていない矢野の立場は、現地歳時記を将来的に認める序文の虚子の意見とはややずれているが、地名季題への言及などさまざまな点で虚子のこれまでの熱帯季題論に寄り添う姿勢が感じられる。

以上、矢野蓬矢の『ホトトギス』における位置付けと矢野の句集『赤道標』を考察した。矢野は、一九四一年富山県知事辞職後、急に『ホトトギス』に取り上げられるようになり、特に軍関係で南方スマトラに赴任したのち、南洋俳句の俳人として大きな発言権を持った人物である。三・一で考察した『ホトトギス』の座談会には、政財界の名士が何人か参加していたが、矢野蓬矢も名士の一人であったといえる。また、句集『赤道標』は、南方に戦線が拡大したのを契機に戦争と直接関わる形で再燃した熱帯季題論の決定版とも言える句集である。矢野が詠んだ句自体が南洋季題、熱帯季題によつて詠まれた句であり、熱帯における季節のずれを踏まえて作句した好例になっている。また、虚子の序文と巻末の矢野の講演録が、帝国主義時代の日本における最後の熱帯季題論であった。

四・三 『ホトトギス』・虚子と戦争

熱帯季題論は、なぜ剥き出しの帝国主義の文脈に巻き込まれたのだろうか。その背景には、『ホトトギス』と戦争の関係、虚子と戦争の関係の問題がある。

『ホトトギス』と戦争の関係を追うと、『ホトトギス』に集うコミュニティ全体が否応なしに戦争に巻き込まれていることがわかる。『ホトトギス』にはつきりと戦争の影響が見えるのは、一九三七（昭和一二）年一〇月号からである。一〇月号の雑詠欄に、「戦線出動の將士諸君の雑詠投稿に限り、軍事郵便葉書で

も差し支えない事に致します」という予告が掲載された。『ホトトギス』の俳句投稿の際には、雑誌の一部分を切り取って貼付しなければならぬきまりだが、戦地では『ホトトギス』が手に入りにくいので、軍事郵便葉書は切り取り部分なしでも受け取る、という意味である。翌一月号には、軍人俳人である長谷川素逝の戦地からの手紙などが紹介される「戦地よりその他」の欄が創設された。一九三七年七月に盧溝橋事件があり、日中戦争が始まったことが、このような形で『ホトトギス』に影響を与えている。戦争が始まった以上、当事国にいる日本の俳人たちも戦争と無関係ではいられない。雑詠欄には、戦地や軍艦からの投句も徐々に増えていた。

次に、戦争に関連する虚子の行動を確認する。虚子は、一九四〇年一月に、内閣主催の紀元二千六百年式典に参列した。翌一二月に、俳句による国家の新体制への協力を目的とした日本俳句作家協会が結成され、虚子はその会長に就任した。この団体は、一九四二年六月に日本文学報国会俳句部会となった。その団体でも虚子は引き続き俳句部会会長を務めている。一九四一年には、満洲と朝鮮を旅行している。六月八日に満洲医科大学で句会、講演を行い、六月一二日には朝鮮の京城帝大での座談会と朝鮮俳句作家協会発足式に出席した。植民地での俳句を支援する活動である。

このような虚子の活動は、戦争への積極的な協力にも見える。しかし一方で、『ホトトギス』に掲載された「升さんの靈前に

報告する」(一九四一年一〇月号)、「升さんに申し上ぐる」(一九四三年二月号)、「三たび升さんに申し上ぐる」(一九四四年四月号)には、戦争が行われている社会に対峙する虚子の苦悩が滲み出ていて興味深い。この一連の文章は、日本俳句作家協会、日本文学報国会俳句部会の一員としての立場から、正岡子規の墓前に報告する形をとっている。直接戦争について触れた箇所はないが、社会の変化により、分立した各派が共同して一つの俳句界にまとまって活動することになり、その責務の重さを感じ会長を辞任したい意向を正岡子規に向かって話しかける、一読では理解しがたい文章である。

一九四〇年の新興俳句弾圧事件では、平畑静塔をはじめとする京大俳句関係者らが合計一〇数名検挙された。これは反ホトトギス派への弾圧であったが、俳壇全体に影響を与える出来事であった。『ホトトギス』の俳人であり、日本俳句作家協会と日本文学報国会俳句部会の理事だった小野燕子は、事件当時俳人監視を行っていたと言われている(清崎・川崎編、一九七九、一七九頁)。戦争による圧力が文学に及んでいたこの時期、虚子は俳句界全体のことを考え、行動し発言せねばならなかった。戦争の圧力による閉塞感によってこぼれ出たのが「升さんに申し上ぐる」の一連の文章であった。虚子にとって「升さん」正岡子規に弱音を吐くという形が、社会への抵抗・不満を漏らすぎりぎりの表現だったのではないだろうか。

ここでは、これ以上新興俳句の問題には深入りしない。しか

し、虚子の花鳥諷詠の伝統俳句の立場は、無季俳句を容認する新興俳句との対立軸を鮮明にすることでさらに理論武装を強めた部分もある(土屋、二〇一三、二六二頁)。さらにそこから日本俳句作家協会・日本文学報国会俳句部会という俳句界の大同団結に展開した。戦争の圧力による花鳥諷詠論の変容の嵐の中で、熱帯季題論は南進論と結びつき、「俳諧國の擴張」という植民地主義・帝國主義的な文脈で語られるようになったのである。

「四 大東亜戦争下の南洋俳句と熱帯季題論」では、季節のずれの問題である熱帯季題論が、南進論と結びついて戦時下に再燃していた様相を検討してきた。四で明らかになった点は、次の三点にまとめられる。第一点は、虚子の考え方は基本的に一九三六年の熱帯季題論とほとんど変化がないことである。その考え方は、季節・季節について日本の歳時記を基準にして、熱帯については一括してその季節を夏に含めるべき、というものである。第二点は、将来的に現地歳時記(国際歳時記)の独立を認める言説が強まった点である。特に台湾に対しては、『赤道標』の虚子の序文において、「亞熱帶臺灣歳時記が制定されるべき運命がほぼ近づいてきた」(赤道標 二頁)と述べるように、台湾の歳時記独立を近い時期に認める発言があった。第三点は、戦争との結びつきが強まり、俳句における南進論という文脈で熱帯季題論が語られるようになったことである。一九三六年の際には、外地を広い意味で捉えており、シンガポールも当時は外国という位置付けであった。つまり、熱帯季題論に

おける季節のずれの問題は、俳句の植民地への広がりだけでなく俳句の国際化の文脈にある問題であったが、戦争中はその南洋が日本軍によって占領され、植民地主義の文脈に収束していった。ブラジルやハワイは連合国側であったため、その地の移民俳句の活動が制限され日本との連絡も途絶えた。俳句の国際化は日本の帝国主義に呑み込まれてしまったのである。

五 おわりに

熱帯季節論について、外地における季節・季節のずれが先鋭化した問題と捉え、熱帯季節論成立以前、熱帯季節論の提案と制定、戦時下の熱帯季節論再燃の三つの時期に分け、台湾やブラジル、南洋その他の植民地の俳句の状況を概観しつつ幅輻的に考察してきた。

熱帯季節論は、その成立以前から問題となっていた、外地の季節のずれの問題を解決する取り組みの一つであり、戦時下には、戦争とより直接的に、国家の方針である大東亜共栄圏の建設や南進論と結びついて、優れた日本文化である俳句の花鳥詠を国内統一し全世界に「俳諧國」を拡張する方向へと変化した。そういう意味で筑紫・福井・蘇らが指摘するように、熱帯季節は日本の帝国主義・植民地主義と運命をともにしたのだといえる。

しかし、近代における俳句の広がりには、植民地だけでなく外国にも達していた。ブラジルやハワイが含まれる「外地」の概

念の曖昧さについては「二 先行研究の検討」、「三 「熱帯季節」成立の経緯と台湾の苦悩」で詳述した。また、一九三六（昭和一一）年の熱帯季節論提唱の契機は、虚子の欧州旅行だったのである。『ポトトギス』の句会の広がりとは別に、ウイリアム・ジョージ・アストン、ポール・ルイ・クーシューらを通じてヨーロッパに俳句が流行の兆しを見せていた。ヨーロッパの俳句受容と虚子の邂逅に刺激され、熱帯季節論と結びついた側面もある。俳句の世界では、「外地」概念が曖昧であったため、植民地の問題と俳句の国際化の問題が混然一体となって論じられていた。ポストコロニアリズムの時代に、熱帯季節論は不必要になってしまったのだろうか。一九八〇年代以後、国際的な俳句組織である国際俳句交流協会が設立されるなど、俳句の国際化が進んでいるが、俳句国際化の萌芽は熱帯季節論の提唱の時期と重なっている。俳句の国際化の問題は、熱帯季節論の中で論じられた、季節のずれの問題、現地歳時記の問題と関わってくる。そう考えると、熱帯季節の問題は、敗戦による植民地の喪失で幕を降ろしたのではなく、ポストコロニアリズムの問題、あるいは俳句の国際化の問題とともに継続して取り組むべきである。例えば、戦後、南洋の熱帯季節について、野本研舟というポトトギス派の俳人が『熱帯俳句の特性に就ての研究』（一九五四）を刊行している。発行場所は奇しくも『赤道標』と同じく富山県である。野本は三菱金属株式会社の鉱山関係の技師で、一九四二年から南方の地下資源開発団の一員としてマレー・スマト

ラ方面に派遣され、現地で終戦を迎えた。「あとがき」には、熱帯俳句を詠んだことは決して無駄ではなく平和のために熱帯季語が必要になる日が来ることを信じている、と結んでいる。戦後の問題として熱帯季題に取り組んだ人もいたのである。

また台湾では、一九七〇年に台湾の季題で日本語俳句を詠む台北俳句会が始まり現在も続いている。また黄雲之編纂による『台湾俳句歳時記』が二〇〇三年に刊行されている。台湾における季題・季節の問題は「常に俳句の創造や研究と共に、時代の人々によって思考され、培われてきた」(沈、二〇二一、一五八頁)のである。さらに、日系人が編纂した『ハワイ歳時記』、『アマゾン季寄せ』も、もつと注目されてよいだろう。

そもそも、虚子の熱帯季題論は、長い期間を見据えた上での発言であったことを忘れてはならない。台湾の俳人たちと意見が食い違ったのは、地域別に独立した季節感・歳時記を認めるかどうかという点であった。虚子は、現地歳時記が独立するには、その地で新季題となるような語を含む良句、その地における名句を詠み重ねた結果が必要だと考えていた。それゆえ、台湾の独立を認めなかったのである。『赤道標』の序文では、台湾俳人たちの努力を認め、そろそろ独立の時期になる、と述べている。ブラジルの佐藤念腹は、戦後一九四八年に自分が主宰する雑誌『木蔭』を立ち上げ、季語研究のページを設け兼題句を募集してブラジルの新季題開発に努めた。念腹念願の歳時記出版は存命中には叶わず、死後二七年後の二〇〇六年に弟佐藤

牛童子が大作『ブラジル歳時記』を刊行した。虚子は写生句の積み重ねを現地歳時記独立の要件としていた。

戦時下の熱帯季題論に注目することで、熱帯季題論が提唱されるに至った周辺の問題、俳句の外域拡大と国際化の問題が明らかになり、国際化の問題を照射すれば熱帯季題論は現在の問題として捉えられると思われる。今後は、虚子の熱帯季題とブラジルの俳句の季節のずれの問題がどう結びつくのか、また今回ほとんど触れられなかった、外国における日系二世三世の世代交代と季節感のずれの問題、外国語で外国人が詠む俳句の季節感のずれの問題について考えてみたい。

注

(一)「季題」は、一般的には「季語」とほぼ同じ意味で用いられる。本論文では、虚子や「ホトトギス」が季題という言葉を使用したことを尊重し、「季題」で統一する。しかし引用の場合、また「ホトトギス」だけでなく季語一般について述べる場合は、「季語」を用いる。

(二)『新歳時記(改訂)』(一九四〇)に掲載されている三五の熱帯季題は以下の通りである。熱帯・赤道・馬來正月・朝陰・木蔭・オアシス・貿易風・スコール・赤道祭・嫁選・象・水牛・鰐・鱈・極楽鳥・熱帯魚・火焰樹・無憂華・鳳凰樹・寶冠木・佛桑花・ドリアン・マンゴスチン・マンゴー・パパヤ・龍眼・バナナ・パイナップル・椰子・檳榔樹・護謨(ゴム)樹・榕樹(筆者注)

ガジマル)・クロトン・月下美人・ブーゲンベリア

- (3) 「マーシャル群島」は第一次世界大戦の際に一九一四年日本が占領(ドイツの保護領であった)し、一九一九年に国際連盟からの委任で日本の委任統治領となった。

- (4) 「パイナップル」は、初版では「鳳梨」の表記で立項され、改版でカタカナ表記となる。

- (5) 『現代俳句大事典』『俳文学大辞典』の項目から筆者がまとめた。

- (6) 三溝(さみぞ)は、俳人三溝沙美をさす。一九二〇年より満洲在住。満鉄などに勤めた。満洲で『ホトトギス』系雑誌『平原』(一九三二―三八)を主宰していた。

- (7) 関圭草は、一八八四年生まれ、一九三〇年に虚子に師事し、一九三四年に『ホトトギス』同人となった。一九三五年当時は東洋紡績の代表取締役であった。圭草は虚子の俳句使節として『ホトトギス』の巻頭を飾ったこともあるブラジルの俳人佐藤念腹と会見するという使命もあった。

- (8) 高浜虚子『渡仏日記』(一九三六、七三頁)の「三月十日」の項に「朝食後また口授筆記。『熱帯季題小論』(大阪毎日)」とある。

- (9) 一九三六年六月二日『東京日日新聞』に発表された「花鳥諷詠を説く」からの引用。『定本高濱虚子全集』第十一巻三二―三五頁。

参考文献

井田太郎(二〇二二)「熱帯季題と風土 台湾の俳句と郷土の創成」『書

物学』Bibliology』、一九、七七―八三頁。

稲畑汀子・大岡信・鷹羽狩行(監修)(二〇〇八)『現代俳句大事典』三省堂。

川名大(二〇二〇)『戦争と俳句』富澤赤黄男戦中俳句日記・支

那事変六千句」を読み解く』創風社出版。

清崎伸郎・川崎展宏(編)(一九七九)『虚子物語 花鳥諷詠の世界、

有斐閣。

呉昭新(二〇一五A)『台湾俳句史(一九八五―二〇一三)』(一) 結社と俳誌』『交流(台湾情報誌)』、八九五、一―七頁。

呉昭新(二〇一五B)『台湾俳句史(一九八五―二〇一三)』(二) 季題、

季語、虚子の「熱帯季題論」と台湾の歳時記』『交流(台湾情報誌)』、八九六、一五―一九頁。

呉昭新(二〇二五C)『台湾俳句史(一九八五―二〇二三)』(三) 日本語俳句と外国語俳句』『交流(台湾情報誌)』、八九七、二九―三三頁。

蘇世邦(二〇〇八)「高濱虚子「熱帯季題論」考」『國學院雜誌』、一〇九(一二)、三四―四七頁。

高濱虚子(一九七四)『定本高濱虚子全集 第十一巻 俳論・俳話集』(二)(高濱年尾・福田清人・深川正一郎・松井利彦・山本健吉編) 毎日新聞社。

田島和生(二〇〇五)『新興俳人の群像「京大俳句」の光と影』思文閣出版。

樽見博(二〇一四)『戦争俳句と俳人たち』トランスビュー。

沈美雪(二〇二〇)「山本孕江「熱帯圏」考―「ゆうかり」におけ

る台湾句と台湾素材の研究―『天理臺灣學報』二九、六七～八四頁。

沈美雪(二〇二二)「高浜虚子の『熱帯季題』論と山本孕江の台湾季題観―昭和期の台湾俳人は『熱帯季題』をどう見ていたか―」『日本台湾学会報』二三、一四二～一六一頁。

筑紫磐井(二〇〇〇)「歳時記の百年 第八回虚子編『新歳時記』」『俳壇』一七(九)、五六～六〇頁。

筑紫磐井(二〇〇九)「虚子の季題論と季題」『國文学 解釈と鑑賞』七四(一一)、八九～九七頁。

土屋忍(二〇一三)「南洋文学の生成 訪れることと想うこと」新典社。

中井祐希(二〇二〇)「航路(ルート)を詠む・起源(ルーツ)を詠む―横光利一と洋上句会(特集 海から見る東アジアの文学と文化)』『跨境 日本語文学研究 = Border Crossings: The Journal of Japanese-Language Literature Studies』一〇、一一七～一四一頁。

西成彦(二〇〇九)「外地の日本語文学」再考―ブラジルの日本語文学拠点視野に入れて』『植民地文化研究』八、二五二～二六〇。

西村睦子(二〇〇九)『正月』のなない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み』本阿弥書店。

野本研舟(一九五四)『熱帯俳句の特性に就ての研究』辛夷社。

福井咲久良(二〇〇九)「高浜虚子編『新歳時記』の三版種」『三田國文』五〇、一～一二頁。

細川周平(二〇一三)「季語のない国―ブラジル季語をめぐって―」『日系ブラジル移民文学Ⅱ 日本語の長い旅』『評論』六〇、一～六五〇頁。

松井利彦(一九七五)『定本高濱虚子全集 別巻』毎日新聞社。

宮坂静生(二〇〇九)「季語の誕生」岩波新書、岩波書店

本井英(二〇〇〇)「虚子『渡仏日記』紀行」角川書店。

矢野蓬矢(一九四五)『赤道標』富山印刷興業社。

山下一海他(二〇〇五)『現代俳句大事典』三省堂。

山本健吉(一九七二)「歳時記の歴史と季題・季語」『最新俳句歳時記新年』、文藝春秋。(ページ数は文春文庫版(一九七七)に拠る)

【謝辞】

本稿は、二〇二二年九月一二日(月)に行われた第三二回戦争と萬葉集研究会における口頭発表「戦時中の『熱帯季題』論再燃―台湾、南洋からポストコロナルのブラジルハイイク」(青山学院大学とオンラインでのハイブリッド開催)に基づき、当日ご参加の皆様からのコメントを反映しつつ書き下ろしたものです。研究会主宰の小松(小川)靖彦氏をはじめご参加の皆様感謝申し上げます。また、高濱虚子・『ホトトギス』関係資料の閲覧について、兵庫県芦屋市の虚子記念文学館に多大なご協力・ご教示をいただきました。合わせて感謝申し上げます。

(しらい・よしかず／高岡法科大学准教授)